



玉
乃
方

玉
乃
方

二
條

路

明治四十一年十二月二十九日印刷
明治四十一年一月一日發行

玉かつら
實價金七拾五錢

版 權 所 有

著 者 幸 田 成 行

發 行 者 和 田 靜 子
東京市日本橋區通四丁目

發 行 所 春 陽 堂
東京市日本橋區通四丁目

印 刷 者 中 野 鏌 太 郎
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印 刷 所 帝 國 印 刷 株 式 會 社
東京市京橋區築地三丁目十五番地

玉かつら

一條路

『ヤ、新井君！』

と、すいしい、ふツくりした、人好きのする聲で呼びかけながら、停車場の三等待合の、いやに硬い木の腰掛から快く身を起して、そして如何にも學生らしく活潑ではあるが、さればと云つて少しも粗野で無く帽子を脱いで挨拶したのは、眼鼻立の上品な、櫻色に冴えた顔の、まだ人の世の苦勞なんぞには汚されて居ない二十三四の男で、其の鷹揚な態度と都雅な風采とに、たい紺メルトンの脊廣を着て居るのではあるが、氏も育ちも決して賤しく無いとが明らかに現はれて居る。

物を捜すやうな眼をして、つか／＼と入つて來た、目立たぬ縞のスコッチの、午後三時過ぎと云ふ奴を着た、丈の高い、色の赭黒い、鼻の短い、如何にもイカツイ、田舎びた、頑丈づくりの、是も二十五にはまだらしい位の年恰好の男は、呼び掛けられると同時に、ギクリと立停まつて、

『ウン、梅辻君か。』

と云ひさま、ギゴハに茶の古い中折帽子を取ると、其の下から棕櫚の毛のやうな眞直な髪の毛の、クリームか何かで分けられて居ればまだしものところを、水ばかりで梳づられて居ると見えて妙に白ツばげて、しかもばらけて居るのが突と現はれた。赭黒い顔と突張つた髪の毛の工合は、これで裸體でさへあれば何様してもインヂアンで、長い鎗を持つてコロンブスの身のまはりに立ちながら怪しみの眼を睨つて居やうといふ風體だが、褒めて云へば精悍の氣は其のさ／＼堅さうな狭ま／＼り逼つた額のあたりに溢れて居るので、梅辻と呼ばれた男の白くて潤い額にしな

やかな髪かみの一ト浪打なみうちつて垂たれかゝつて居ゐるのと面白おもしろく相反あひはんだいして居ゐると云いつても宜よい。

『早はやかつたナア。』

『七八分ふんばかりも前まへに來きたよ。後おくれまいと思おもつて。』

此こ様な短話たんわが取り替かはされて居ゐる間まも無なく、切符きつぷが賣うり始はじめられると、構内かうないは忽たちまちざわ付き出だす、二人ふたりも出札場しゅつさつばやうの方はうへ其その眼めを向むけた。

『赤あかに仕しやうネ。』

鼠帽子ねずみぼうしが物優ものやさしく聞きくと、

『勿論もちろんサ。』

と茶色帽子ちやいろぼうしが荒あらく答こたへる。そして財囊かみいれを出ださうとでもするのか身みを反そらせてポツケツトへ手てを差さし込こんで何なにか探さぐりにかゝつたが、其その時ときは既すでに鼠帽子ねずみぼうしは切符賣場きつぷうりばの人ひと込こみに揉もまれて居ゐた。

茶帽子は其の方を見ながら猶もモチ／＼やつて居たが、やがて取り出したのは小さなマツチ箱で、今度は又忽ちにして左りの衣兜から朝日を把み出した。そして直に其の封を切つて一本抽き出す、マツチを擦る、バフリ／＼と吸ひ出した。梅辻は手にして來た二枚の切符の一枚を新井に渡すと、新井は一寸點頭するやうにして謝意を表し、其の返しとはあるまいが烟草を出して、取れと云はぬばかりにした。梅辻は軽く會釋して一本取つて火を移した。兎角する間に新井は其の第二本を吹かし始め、梅辻は其の手にしたのを靜かに捨てやうとする頃になつて、改札口は開かれた。人浪は其處に打ち出した。丁度二人共サアと云ふので腰掛から腰を離れさせた時、轆轤と云ふ車輪の音と勇ましい馬蹄の地を蹴る音がして馬車が一臺此所へ駈け着けたので、衆人一齊に振り返つて見ると、油でも塗つてあるかと思はれるやうな艶の好い栗毛の馬の、丈は高し、頸は長し、龍馬とでも云ひたいやうに立派なのが二頭揃つて、銀金具のきらめき渡る馬具美しく、入口の

廂へ問へさうになつて停まつたのであつた。

馬車に續いて數輛の人力車が来たが、梶棒が下ろされるや否や其等の車の上からは、禿頭の三太夫然たる男や、岩藤が萎びたやうな中婆さんや、赤馬鈴薯に手足を生やしたやうな御付きが、こぼれて落ちるが如くに慌て、降りて、そして馬車から降りる自己が主人に寸時も後れまいと競つてひよこ付き出したが、恰も好し馬車の扉は開いて五十餘りの品格の好い紳士が現はれる、續いて其の夫人にしては少し若過ぎるやうであるが服裝が慥に其と證據立てる三十前後の此も品の好い美人が現はれたので、人々が謹んで扨從してゾロ／＼停車場へと入つて來た。

人は十人十色だが、場内の衆人は誰も皆今來た人を何でも立派な華族だらうと想像して、そして其の榮華を羨むやうな目を舉げて、待合室へ入つて行く一行の衣服や髪飾りや履物や從者等が持搬ぶ手荷物や何ぞの結構づくめなのを見送つて居るやうに見えた。

新井は身動きも仕無いで、其のやゝ赤く濁つた眼でジロリと見た儘冷然として居たが、梅辻は去つて待合室へ行つた。彼の貴族らしい人と梅辻と何様いふ間か知らぬが互に敬禮し合つて居る様子の慇懃さから見ても淺からぬ知合であるといふ事は慥で、又何を話して居るか聞えぬが打解けて語り合つて居る事は雙方の笑顔から見ても猜知された。雙方の身振り手振りから顔の動きまでが、少し歩を動かして覗ふと芝居でも見るやうに此方から能く見えて居るのだから。

で、其の態を見た所の新井の面色は餘り好くは無かつた。併し何様といふことも無く、たい煙草を咬んだまゝ妙に、足に力を入れて、ストストと一ツところを往き戻りしては、ちよいとと待合室の方を覗くに止まつた。

梅辻は其の中此方へ戻つて來た。顔色には何の蟠りも無い。例の如く眼もすしければ聲も矢張り涼しい。

『や、失敬失敬。一寸挨拶を仕たらば、何處へ行くの何を仕に行くのと色々聞き

糺ただされて、おまけに同乗どうじようしたら宜よからうのなんぞと云いはれたが、やつと逃にげて來きた。』

『何なんだネ、彼あの人は。』

『ソラ何い日っか話はした事ことの有ある彼あの伯爵はくしやくサ。伯爵はくしやくだけれども眞しんに好いい人ひとで。』

『フン、爵位しやくゐやなんぞあると誰たれでも好いい人ひとに見える。人間にんげんに鍍金メッキが掛かかつて居ゐるやうなものだからネ。』

何なも然さう様げき激げきして居ゐるでは無なからうが險惡けんあく千萬せんばんな語氣ごきだ。

『コリヤ甚ひどい、驚おどろいた、酷論こくろんといふものだ。本當ほんたうに識見しきけんも同情どうじやうも有ある好いい人ひとなので。今いまに僕ぼくの爲ために口くちを利きいて呉くれて、僕ぼくを洋行やうかうするやうにして呉くれやうといふのも彼あの老伯爵らうはくしやくなのだよ。』

『ハ、道理だうりで辯護べんごするネ。同車どうしやするが可いいぢや無ないか、白しろい切符きつぷだらう。』

『からかつちやアいかんよ、何なんの爲ための旅行りょかうなんだい？ 全まっく遊あそびの爲ためばかりとい

ふのでも無いのぢや無いか。』

『ハ、、、左様かい、サア行かう君!』

『ハ、、、行かう。』 定めし雑沓するだらう。』

改札口へ掛かつて、赤毛布の老夫や薄穢い婆さんなどに押返されながら二人は通つて、やがて切符の色が示す一車室の中に相對して陣取つた。

二人は共に或私立大學の學生だ。新井は貧家に人となつて、今でも猶困窮して居るのを免れない、其の爲に學業の餘暇をいろ／＼な事に使つて學資や小遣錢の一部を自分の手で造つて居る位で、それに反して梅辻は小さくても華族の家に生れ、二男でも只一人の親に鍾愛されて、十二分に不足は無く教育されて居るのだから、二人の境界は實に月鼈の差が有るのだが、随つて二人の思想感情も雲泥の差が有るべきだが、それでも縁は奇なもので、近來知り合になつてから甚だ相親んで居るのである。といふものは梅辻は其の身が華族に生れた爲に、其の仁慈の美性質

が然らしむるので有るか何様か知らぬが、却つて小作人や労働者や細工人や薄給官吏やに甚く同情して、そして小説や雜書に散見して居る社會主義的思想を悦んで是とした結果、何時と無く自分は細民の荷擔人となつて働きたいやうな考を懷くに至つて居たところへ、殆ど極端な社會主義のやうな議論も吐けば同情も有して居るし、そして實際に於ての其の寒酸の狀は人の同情を惹くに足る新井に値遇したので、大に悦んで其の人に接近すると、新井の方ではまた純袴子弟には珍らしい傾向の思想を持つて居る、自己の歸依者のやうな、同志者のやうなものを得たので、勿論今直自分の懷抱して居る主義主張を何様仕やう斯様しやうといふ念は持つて居ないのではあるが、差當り一味の談敵として自然他の同窓よりは梅辻と談論もすれば往來もするやうになつたのである。で、二人は昨今の間柄であるに關らず親善の仲となつて、そして此の春季休暇に、梅辻が云ひ出して、二三日の旅行を試み、且つ其間に社會の下級者生活の實際をも觀察し得たらば觀察し

やう、併しよしんば其は怎樣あれ都外に嘯傲するだけでも宜い、といふので、初めて此の二人——性質も素性も境遇も異つて居る此の二人は一つ車に乗つて一條の路を旅行するのである。

三等車の内は何時も同じ模様である。たゞ取り留めも無くわやくと仕て居るばかりだが、今しも車外を先刻の伯爵一行が通るので、人々は窓から首を出して見た。梅辻は却つて其の一行に見出されぬやうにとであるか、窓にも近付なかつたが、新井は矢張り窓から見た連中だつた。そして一行が通り過ぎて一等室へ入つて仕舞つたのを見て手にして居た煙草を棄てた。

『君も彼室へ行つたら何様だ。三等室へは乗つた事が無からう。』

新井が斯様いつたのを聞いて慌てゝ遮るやうに梅辻は、

『何故？ 僕だつて三等室へ乗つた事位ある。併し實を云へば大概は青切符の世話になつて居るが。』

と無邪氣に斷つて居る背面の方で、

『いづれ昔時なら下に居ろくを呼ばらせた何處かの殿様だべい!』

と、今通つた伯爵の噂だらう、野良聲を出して百姓らしい一人の爺さんが云ふと、其の同伴者らしい、絹絲入りの變に光る綿入に黒紬の羽織を着て、茶の綿フラのシャツに留め鈕釦の輝くのを附けて居る二十七八の、裁判所にも二三度出て理窟を捏ねたり、代議士選舉の時の運動員になつて口も利いたり仕たらうと云ふ下品な男が、

『左様でしやうよ。だが今ぢやア華族様だと云つても鄭寧にするなア宿屋と巡查位のものになりました。へ、へ、。』

と嘲けるやうに笑つた。梅辻は其を聞いて非常に不快を感じた。何故と云へば其は事實に於て全くの誣妄で、華族は今尙到る處に尊敬されて居るのだから、今の一言は畢竟するに全く其の男の下劣な品性の嫉妬心から燃え出した黒烟りに過ぎ

ないと認めたからだ。

汽車は今上野を後にし出した。物の響きの間から復其の男の聲が聞えた。

『白切符も行くところまで行きやア赤切符も行くところ迄行きませア、ハ、ハ、ハ。』

これは事實其の通りだ。然し何様も嫉妬かヒガミかの句がするやうに梅辻には思へた。百姓の老人は例の大きな聲で、

『遅牛も淀、速牛も淀といふ古い世話見たやうでがすナ。』

と笑つた。梅辻にも其の言葉は無邪氣に可笑しく聞えた。新井は一切無感じのやうだつた。

車の音は段々に激しくなつた。新井は我儘に腰掛へ大きくなつて坐つて、ポケットから雑誌を出して読みはじめた。梅辻はたゞ窓外を眺めた。

我孫子から成田線へと移つて、二人は成田に下車し、新勝寺を見物した。新勝寺の境内には種々の人が寄附した色々の像や(劔や名を刻んだ碑やなんぞ、随分盛ん

に澤山な異なるものがある。新井は其等を睨め回して歩いたが、最後に

『下らないぢや無いか！』

と一語で評して退けた。簡單は威嚴である。梅辻も餘り此の境内の景色を好いとは思はなかつたから、直に其の評に服従した。

『僕も詰らないやうに思ふネ。』

と云つた。けれども梅辻は、俗惡とても評したい此の境内の景色は、要するに新勝寺の本尊の信者等が區々に自分の渴仰心を表現したためで、甲乙丙丁の間に何の顧慮も斟酌も無く互に箇々の物を寄贈したから起つた事である、恰も大宴會に多くの醉客等が或は義太夫を語るもあり或は謠曲を怒鳴るもあり或は甚句を歌ふもある、それを外から聞けば雜然たる非音曲的の響となつて聞えるのと同じ事だと感じたのである。で、

『まるで統一といふものが無いから。』

と、自分の言に自分で割註を爲た。綿密は親切である。

二人の云つたことは言語に於ては相反しては居なかつた。而し意義に於ては互に相異つて居た。新井は新勝寺境内全體に存在して居る舊い信仰から、又其の信者の精神から、信念の表白の方法から、又目前に見えて居る其等の結果の狀態に到る迄の一切を引くるめて、下らないと一喝したので、梅辻は單に目前の景色に就いて批評し、且つ其の不美不妙の所以を解釋したのであつた。

『統一が無いからツテ。統一が有つたつて何だつて仕方が無いぢや無いか。』

新井の語氣は例の如く強い。

『然様いへば其は然様だが、解釋して見たらマア其邊だらうと思ふネ。』
梅辻は例の如く優しい。そして又例の如く親切で、

『だつて君、何程新勝寺の坊さんが世間的の人でも成田の隨喜者が何様いふ階級の人であつても、其の中の誰かが一人中心になつて、そしてこれだけの境内の